

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI

とさぶし

TAKE FREE

No.
56



SUPER
LOCAL
高知家

祭りの かたち

土佐祭り人の表現



祭りの かたち

～土佐祭り人の表現～

アートやデザインの感性から切り取ってみても、
神輿に、衣装に、化粧に、装飾品に、技に、
それぞれ個性豊かな土佐の祭りは面白い！
今回は、そんな「祭りのかたち」をご紹介します！

祭りをつくる、 かたちと人

祭りは、地域の人々が集い、祈りや願いを込め、時代を超えて受け継がれてきた大切な文化。ここ高知にも各地に多彩な祭りがあり、それぞれ独自の由来や歴史、個性豊かな伝統が息づいている。

そんな祭りを彩るのは、さまざまな神輿（みこし）や色鮮やかな衣装、歴史を物語る装飾品たち。さらに、個性豊かな唄や踊りなども欠かせない。そうした「祭りのかたち」は、はるか昔に生まれたものでありながら、現代を生きる私たちの感覚で見ても新鮮に映るから面白い。

「祭りのかたち」の由来、歴史、そしてそれらを受け継ぐ土佐の祭り人たちに迫ると、あらためて土佐ならではの祭り文化の奥深さが見えてくる。

かたちの奥深さを知ると 祭りがもっと面白くなる!

華やかな笠と装束の伝統には
踊る人もつくる人も欠かせない

菅笠(すががさ)に取り付けられたカラフルな猿の人形は「災いが去る」といった験を担いでいるという。



猿が手をつないで
輪になっているよう!



早朝4時30分から踊り始め、夕方4時過ぎまで、室戸市内の神社や寺、市役所、水産会館などをまわって奉納する。

室戸市の夏の日差しに映える、目が覚めるような色鮮やかな笠と装束。祭りを何も知らずに訪れた人も、思わず足を止めてしまうほどの存在感だ。聞こえてくる鉦(かね)と太鼓の囀り(はなし)は、音頭取りの唄に合わせ、輪になって踊っているのは室戸の男たち。この「シットロト踊り」は、漁業に携わる地域住民が、魚の供養と豊漁、航海の安全を願い、市内の神社や寺など30カ

所近くを早朝から巡って踊りを奉納する伝統行事。笠は芸西村の「笠芸会(りゅうげいかい)」が手がけ、そこに付ける猿の人形は、地元で手芸店を営む関(せき)ちまりさんが手作りし、かつてシットロト踊りの音頭を務めた橋本規矩夫(はしもときくお)さんが仕上げを担う。300年以上続くといわれるこの踊りは、今も住民たちの手によって受け継がれている。

シットロト踊り

- 開催地／室戸市内各所
- 開催時期／毎年旧暦6月10日

シットロト踊り保存会

やながわ よういちろう

柳川 洋一郎さん

今後も継続していけるよう、自分も後輩に引き継ぐその時まで、最前線に立って頑張りたいです。

目玉!

祭りのシンボルに込める思い

見るものの目を引く神輿や提灯台は、まさに祭りの華。細部にまでこだわりが詰まったその意匠に、地域の人々が大切に守り、古くから受け継いできた祭りへの思いが表れている。



いくつもの大きな提灯台が市街地を練り歩く「しまんと提灯台パレード」。その由来は江戸時代にまでさかのぼるとされており、地元の若手を中心に脈々と受け継がれてきた。使われる提灯は、1台につき約200個。さらに提灯台を彩る700

華やかな提灯台を飾るのは
祭りを愛する地域の人の手

個以上ものフラワーペー

パーは、毎年各地区の人たちが一つ一つ手作りしている。

4m×4m×6mという巨大な提灯台は圧巻のひと言

で、よく見ると土台のつくりや提灯のデザインは地区ごとに異なり、それぞれの個性が表れているのも面白い。

「この祭りは年に一度、この日のために各地区のみんなが作り上げるんです」と話す山崎さん。大きな提灯台の細部に、地域の人たちの思いと手仕事が見え隠れしている。

「この祭りは年に一度、この日のために各地区のみんなが作り上げるんです」と話す山崎さん。大きな提灯台の細部に、地域の人たちの思いと手仕事が見え隠れしている。



中村提灯台保存会 会長
中村 隆之さん
中村 隆之さん

観覧はもちろん、当日参加で担ぎ手もできます！一緒に盛り上がりましょう！



祭りが終われば解体され、来年まで倉庫でひと休み。手前に見えるのは「子供提灯台」で、土台の下にタイヤがついているため楽に移動ができる。

よさこいチーム「幡多舞人」副代表
伊吹 美乃さん
伊吹 美乃さん



パレードの日は、提灯台が練り歩く合間に、伝統ある「なかむら踊り」やよさこいチームが演舞を披露し、祭りを盛り上げる。



なかむら踊り・しまんと提灯台パレード

- 開催地／四万十市中心市街地
- 開催時期／毎年7月最終土曜

神輿

鎌倉時代、天皇が重要な儀式で着座する「高御座(たかみくら)」も八角形だった。神輿の由来には諸説あるが、「それだけ当時の住民が、大国さまに最高のものを献上しようとしたのでは」と杉本宮司。

祭りの

梶本神社 秋大祭

- 開催地／いの町大國町
- 開催時期／毎年11月23日



「いのの大国さま」として親しまれる「梶本神社」の秋祭りでは、約1000人が連なる「おなばれ(※1)」が町内を進み、御神体が流れ着いたとされる仁淀川の御旅所(おたびしよ※2)へと向かう。その目玉は「八角形漆塗神輿(はつかくがたうるしぬりみこし)」だ。目を引くのは、華やかなデザイン。一般的な四角形の神輿とは異なる八角形の姿は全国的にも珍しく、さらに漆塗りや金色の装飾、鳳凰もあしらわれ、国の重要文化財に指定されている。これは鎌倉時代、弘長3(1263)年に奉納されたものだという。杉本宮司は「大国さまをお乗せ

神輿のデザインに込められた
この上ない感謝の思い

梶本神社 宮司
すぎもと やすくに
杉本 泰郷さん

地域の皆さんが大切に
受け継いできた、いの町の
伝統文化です。ぜひ
見に来てください。



秋祭りは、旧伊野町の12地区が毎年交代で当地区を務め、住民自ら準備・運営している。おなばれで使われる神輿は複製。

※1 神輿などが町内を巡る行事
※2 祭りの際に神輿が神社から移動し、神様が一時的に滞在される場所

踊りと装い



はなとり おどり 見ても楽しい 土佐の「花取踊」

地域ごとに異なる華やかな衣装に身を包み、500年以上とも言われる長い時を経て踊り続けられてきた、土佐の「花取踊」。その意匠の魅力と現在を訪ねた。

色に形に個性がいろいろ
地域色豊かな花取踊

「花取踊」とは、土佐を代表する風流踊（ふうりゅうおどり※）のひとつ。主に秋祭りや、若者や子どもたちが華やかな衣装をまとい、太刀や薙刀、鎌などを手に踊りを奉納する。

県中部では「太刀踊り」と呼ばれ、幡多地方にも広く分布するが、須崎市から津野町付近には特に目を奪う衣装の花取踊が分布している。「カシラ」や「花笠」などと呼ばれる、鳥毛を使ったり色紙で飾った笠を被り、袴や法被（はつぴ）に櫛（たすき）をかける姿が一般的だが、衣

装の中身では「太刀踊り」と呼ばれ、幡多地方にも広く分布するが、須崎市から津野町付近には特に目を奪う衣装の花取踊が分布している。「カシラ」や「花笠」などと呼ばれる、鳥毛を使ったり色紙で飾った笠を被り、袴や法被（はつぴ）に櫛（たすき）をかける姿が一般的だが、衣

※衣装や持ち物に趣向を凝らし、歌や笛、太鼓や鉦（かね）に合わせて踊る民俗芸能

おくさきせいま
奥崎 誠真さん

ひときわ目立つクジャクの羽がついている冠り物。驚くほど軽く、頭にのせて固定させる。

まえだ くおん
前田 来音さん

太刀役は十文字にタスキをかけ、背中に長い飾り帯を垂らす。腰には赤い飾り紐を巻く。

大谷花取踊

- 開催地／須崎市大谷「須賀神社」ほか
- 開催時期／毎年10月18日

大谷花取踊保存会
もりみつ けい
森光 慶さん

大谷地区で続いてきた伝統をこれからも守っていきたいです。太刀役、太鼓役、青年団も参加者募集中です！



須崎市内の「須賀神社」「神明宮（しんめいぐう）」「津野（つの）神社」で奉納されるほか、大谷地区の各家々をまわって踊る「しまい神事」も行われている。



ものゝ 香美市物部町に 伝わる踊りの伝統と 「お山のディスコ」

「ばちばち」「まわり千鳥」「はっさん」「根木屋(ねきや)太刀踊り」…。なんともユニークな響きのこれらは、いずれも香美市物部町に古くから伝わる踊りの名前だ。このうち「はっさん」は、800年以上前、この地に落ち延びたとされる平家の落人(おちゅうど)が、故郷を思っ舞い踊ったものとも伝えられ、やがて夏祭りなどで踊られる盆踊りとして受け継がれてきた。その振り付けは、現代の楽曲とも相性抜群。「お山のディスコ」こと「奥物部湖湖水祭」では、ディスコミュージックに合わせて、地域内外の老若男女が一緒になって踊るという盛り上がりを見せている。



奥物部湖湖水祭

- 開催地／香美市物部町大栃
- 開催時期／毎年8月



大太刀役が冠のカシラには、
山鳥と東天紅(とうてんこう)
の鳥毛が使われている。

背には七色の布を用いた「タクリ」と呼ばれる飾り
を長く垂らす。タクリは師匠が手作りする。

葉山花取踊は現在、姫野々、白石、新土居の3地区が伝承。今年から地区外の子どもにも呼びかけ、参加の枠を広げての開催を試みている。



とがの 斗賀野花取踊

- 開催地／佐川町中組「白倉神社」ほか
- 開催時期／毎年11月12日



斗賀野花取踊保存会 世話人
しょうの おさむ
庄野 治さん



斗賀野花取踊保存会 世話人
おかぞえ げんご
岡添 玄吾さん

祭りの主役は斗賀野の小学生！花取踊の伝統も楽しさも子どもたちに伝えています。



松林を疾走する「松風」など、ダイナミックな演目が見どころの斗賀野の花取踊。動きやすいよう足元には「もみ殻」が敷かれている。

葉山花取踊

- 開催地／津野町姫野々「三嶋神社」
- 開催時期／毎年10月第4日曜



若手師匠
たかはし おうし
高橋 桜獅さん

花取踊が続いていくよう、師匠の先輩方と一緒にしっかり子どもたちに伝えていきたいです。

花取踊のトレードマークでもある花笠。色とりどりの折り紙による鮮やかな装飾も魅力的。



しょうの みやび
庄野 雅さん

おかぞえ まや
岡添 茉耶さん

祭りの化粧

素顔を消す化粧でさらに大胆に！

素顔を隠し、いつもとは違う自分になる「弘瀬のおなばれ」の化粧。
決まった型はなく、描く人の感性が爆発！その自由さが、祭り人をさらに大胆にする。



使うのは白・黒・赤



化粧に使われるのは白・黒・赤の三色。食紅で作られた赤色は、口を大きく縁取ったり、鼻を目立たせたりと、「おどけた」表情を演出するのに欠かせないアクセントカラー。



黒で模様を描く



白塗りの肌に墨でひげや眉間のしわを描き出す。ほつれた曲線やダイナミックなタッチを交えて筆を走らせ、役に合わせた表情を力強く形作っていく。



顔全体を白塗り



おしろいを肌に伸ばし、顔全体が真っ白に染まるまで丹念に塗り重ねていく。化けるための最初の工程であり、素顔を消し去ることで役への没入が始まる。



輪郭や模様を整える



いよいよ仕上げの作業！鏡にとらめっこしながら、全体の模様を微調整。ここまでかかった時間は約20分。最後までその表情は真剣そのもの。

顔に筆を走らせ役になりきる

「ひょうげ(※)」に息づく情熱

※おどけた、ふける、ひょうげんなど



弘瀬地区長
おしむら ただやす
吉村 忠保さん

個性的な化粧が魅力の祭りです。私は毎年自分でテーマを決め、思いを込めて描いています。

高知市土佐山弘瀬の「仁井田神社」で行われる「弘瀬のおなばれ」。300年以上前、悪病が流行したことを契機に始められたと言われる。見る人の目を釘付けにするのは、なんと言っても役を務める男性たちの個性的な化粧。太刀役は墨や食紅でひげや傷痕を描き、豪快でおどけた表情に。一方、長刀役は紅と黒の線で、女性らしい柔和な表情に仕上げる。面白いのは、そこに決まった型がないこと。己の感性のまま筆を走らせた顔は、どれも鮮烈でアーティスティックだ。かつては専任の化粧師がいたが、現在は役を務める本人が化粧を施す。継承者の吉村さんは「こんなユニークな祭りが高知の山の中でずっと続いてきた。僕の世代で終わらせたいかん」と話す。自ら顔をつくり、役になりきる「ひょうげ」の情熱は、地域で受け継がれ、土佐山に晩秋の訪れを告げている。



祭りの道具シリーズ

これな〜んだ? その一



絵金祭りに欠かせない 影の立役者！

日が落ちてもしっとりと汗ばむ蒸し暑さが残る。そんな7月の宵に開かれる「土佐赤岡絵金祭り」では、香南市赤岡町の商店街に、絵師・金蔵(さんぞう)こと絵金やその弟子たちが描いたおどろおどろしい芝居絵屏風の数々が立ち並ぶ。復讐、裏切り、嫉妬……。そんな見るも無惨な絵に目を奪われるが、それを引き立てるのがロウソクの明かり。「芝居絵屏風には膠(にかわ)が使われているので、ロウソクの炎が反射して、光っているようにも見えるんです」と話すのは「絵金蔵(えきんぐら)」の中西洸太郎(なかにしこうたろう)さん。絵金が描いた人間の濃密なドラマを、怪しく照らし出している。



土佐赤岡絵金祭り

- 開催地／香南市赤岡町
- 開催時期／毎年7月の第3土曜と日曜

完成！

思いきり塗って
思いきりひょうげる
祭りの目だけの、とっておきの顔！



伍

花笠をかぶって完成

鮮やかな花笠を頭に被れば支度は完了！自らの手で納得のいく化粧を施し、吉村さんもお満悦の表情。一度見たら忘れられないほどインパクト大！

仁井田神社の秋祭り(弘瀬のおなばれ)

- 開催地／高知市土佐山弘瀬
- 開催時期／毎年11月8日



昭和期に撮影された個性豊かな化粧の数々。長い歴史の中で化粧にも流行があり、江戸時代にはなかった長いひげも後年になって広まったという。時代ごとの変化が面白い。

「弘瀬のおなばれ」では、伝統芸能の棒つかい、基盤振り(ごばんふり)、獅子舞などの、さまざまな奉納芸が披露される。

祭りの

面

竹と紙粘土で作られた「張り子」の面は驚くほど軽量。雌鹿の頭上には季節の草花が生けられ、なんとも可愛い。



練り歩きや伝統芸能の神事などで被られる祭りの面は、
長年、同じものが受け継がれていることも多い。
その由来にあらためて注目すると、地域の継承への強い思いが見えてきた。

鹿の面を被り、太鼓を叩きながら踊り続ける20分間。1～2ヶ月間、ほぼ毎日練習を行い受け継がれた師弟の時間が、この一瞬に詰まっている。



五ツ鹿踊り保存会のみなさん

じよし 地吉八幡宮秋季大祭(五ツ鹿踊り) いっしか

- 開催地／四万十町地吉
- 開催時期／毎年11月1日

愛らしい鹿のお面とともに

地吉の伝統が受け継がれる

愛媛県境にも近い山あい、四万十町地吉地域には、樹齢800年の「夫婦杉」が見守る「地吉八幡宮」がある。ここで秋祭りに奉納される「五ツ鹿踊り」は、四頭の雄鹿が一頭の雌鹿をめぐって争う物語を表現した伝統芸能だ。踊り手がつける鹿のお面は、五ツ鹿踊りのルールとされる愛媛県宇和島市の職人が手がけたものだという。傷めば塗り直すなどの修繕を重ねながら、大切に使い続けている。「まさか自分が踊ることになるとは」と踊り手に披露された当時は懐かしみながら、慣れた手つきでお面を組み立てるのは、酒井材さんと酒井龍一(さかいりゅういち)さん。継承のため地域外の人や女性の参加も視野に入れながら、お面とともに伝統を守り続けていく。

伝統を守るためにも、自分たちの代では地域外の人や女性を迎え、新たな風を吹き込んでいきたいです。

五ツ鹿踊り保存会会長

さかいもとき

酒井 材さん





祭りの道具シリーズ

これな〜んだ? その三



怖い？笑える？ 岩原神楽の名物・爺面！

ちょっと怖くて、どこか可笑しい。そんな表情が印象的なこの面は、大豊町の「岩原神楽」で舞台を沸かせる道化役、爺の面だ。主役の舞い手の隣でこっけいに動いてみせては、場を大いに盛り上げる。そんな爺役は「すべての舞を覚えた者でないとできないんです」と「岩原神楽保存会」の下村尚史(しもむらたかし)さん。どこで登場し、どのタイミングで動きを崩すのか。それを身につけ、かつては2時間以上演じ続けた人もいたそう。ひょうきんな面の奥には、この神楽を知り尽くし、真剣に舞台を支える演者の技がある。



岩原神楽

- 開催地／大豊町岩原
- 開催時期／毎年10月15日

梶原町の「三嶋神社」の秋祭りといえ
ば「津野山神楽」の奉納が有名だが、町
内から約100人が参加する「御神幸
(おみゆき)」も古くから受け継がれて
いる。その先頭を行く巨大な「牛鬼」
が、厄払いのため恐ろしい形相をして
いる。二方行列の後方で町民に福を届け
る「七福神」の表情は、大人も子どもも
思わず顔がほころぶ、どこか親しみの
ある笑顔だ。禰宜・掛橋さんは「私が知
る限り、長年この面を使い続けようが
やないろうか」と話す。面はもちろん、
祭りの道具の修繕をしているのは、町
内の職人・若宮康秀(わかみややすひ
で)さん。御神幸では自身も貝吹きの
役を20年以上にわたって担っている。町
民が手を取り合うことで、祭りが受け
継がれている。

軽くて柔らかく、手作業
で加工しやすい桐(き
り)や、紙粘土で作られ
ているお面。地元民に
いそうな、ほっこり温か
みのある表情。



御神幸は、町民がいくつも
ある役割を担い団結して準
備する。中でも「牛鬼」は花
形で人気が高く、自ら名乗り
を上げる人が多い。



祭りを支える地元の職人・若宮さん

三嶋神社秋祭り (御神幸)

- 開催地／梶原町梶原
- 開催時期／毎年10月29日

ねぎ
三嶋神社 禰宜
かけはし みわ
掛橋 水和さん

三嶋神社は、町民の
皆さんの大切な憩い
の場所。関わる全ての
人によって支えられ
ています。



祭りの

技



見るものの心を高揚させる祭りのパフォーマンス。
華やかな技に込められているのは、
磨き上げた技と祭りへの熱い思い。
継承され続ける祭りの技の奥深さに迫る。

一投入魂の鳥毛ひねり

そこに込める祭りの技と心



華麗な技に大歓声と拍手が飛ぶ。鳥毛ひねりは3つの部落が互いの技を魅せ合うのも特徴で、それぞれのプライドが妥協なき技を支える。



秋葉まつり

- 開催地／仁淀川町別枝
- 開催時期／毎年2月11日

山間の盛大な祭りとして名高い「秋葉まつり」。中でも、その花形といえるのが「鳥毛ひねり」だ。長さ約7m、重さ約8kgの鳥毛を投げ合うこの技は、投げる瞬間にスナップを加えて空高く遠く投げ、受け手もまた、ジャンプや回転を交えて華麗につかむ、まさに魅せる技。「技と心、両方が揃わないと投げられません」。そう話すのは、投げ手の片岡さん。

ん。本番は「発勝負」。そのため、祭りに向けて毎日40〜50本もの重い鳥毛を投げる練習を重ねる。会場に響く「魅せろよー！やれよー」の声に「絶対に恥ずかしい投げは見せない」という思いが湧き上がり、演者の心は熱く奮い立つ。その瞬間に表現されるのは、技の美しさと熱量。その「投に、積み重ねた練習と、祭りに懸ける強い思いが込めらる。

みなさんの記憶に残る鳥毛ひねりにしたい！妻の手厚いサポートに助けられています！

鳥毛を投げる

かたおか たいせい
片岡 太星さん

かたおか かえで
片岡 楓さん

よさこい祭り以外にも、お祭りがあるなら知りたいです。(高知県・40代)

声届きゆう！

役になりきることのでつむがれる舞

次代へつなぐ千年の神楽

「土佐の神楽」の一つとして千年以上の歴史が受け継がれる「津野山古式神楽」。五穀豊穡や無病息災を願い、すべてを舞い終えるまでになんと約8時間を要するほど多くの演目がある。17歳の鈴木さんが舞人として担当するのは、宝剣を探し出す鬼神「山探し」の舞。宝剣を失い、探し、見つけ出す。その所作をどう見せるか、舞殿（まいどの）に入る直前までは緊張するものの「演じる人物になりきる」とことでその役を舞いきるという。「神楽の存続と継承を何より大切にしている」と話すのは、保存会の豊田庄二（とよだしょうじ）さん。かつては女人禁制だった神楽も、今では女性が参加できるようになり、さらには「よさこい祭り」の前夜祭など、地域外のイベントにも出演。次世代へ伝統をつなぐために、新たな展開を見せている。

津野山古式神楽

- 開催地／津野町内の各神社
- 開催時期／毎年11月中旬頃



鬼の「大蛮（だいまん）」が、生後1年未満の赤ちゃんや初参りの子どもを抱っこして、無病息災を祈る伝統的な習わし。

「山探し」では、宝剣を探す場面や見つけた瞬間の動きに注目してほしいです！

まいびと

10年以上参加している舞人

ずずき そうた

鈴木 颯汰さん



祭りの道具シリーズ

これな〜んだ？ その三



「お弓祭り」に
放たれない矢がある！？

北川村の「星神社」で長年受け継がれてきた「お弓祭り」。千八筋（せんやすじ）の儀式では、その名の通り、選ばれた12人の射手が1008本もの矢を射るが、それに先立って登場するのが、こちらの「雁股（かりまた）の矢」。この矢は実際には放たず、弓につがえたまま射手が後方を除く三方を見渡し、水害や雷、嵐など、人々の暮らしを脅かす「悪魔」を払うという。保存会の浜渦尚（はまうずひさし）さんは「過疎化などで射手の担い手が減ってきてはいるが、歴史あるお祭りを残していきたい」と話してくれた。



お弓祭り

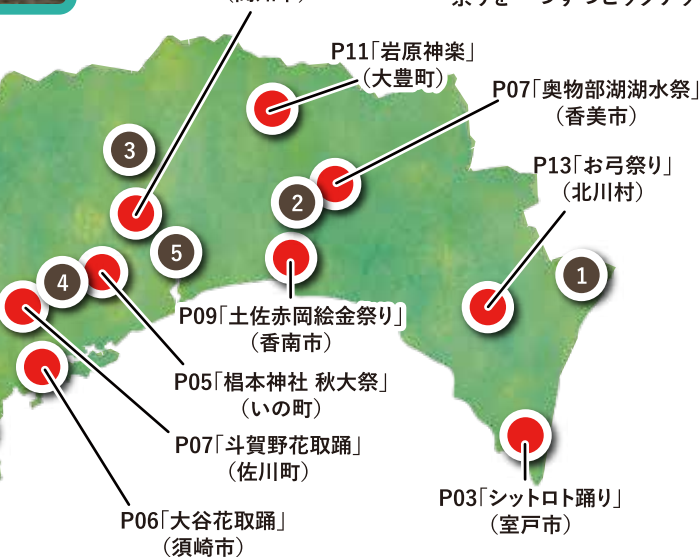
- 開催地／北川村木積
- 開催時期／西暦奇数年の1月8日（2年に一度開催）

まだまだある！

土佐の祭りのカタチ

P08-09「仁井田神社の秋祭り」
(高知市)

まだまだある、高知の面白い祭り。県内7つのエリアから、地域で大切に受け継がれてきた祭りを一つずつピックアップ。知っている祭りも、改めて見てみると新しい発見があるかも！



駆ける馬と放たれる矢 その迫力を今に

疾走する馬上からのめがけ、鎗矢(かぶらや)を射る迫力満点の儀式。乗馬する農耕馬の減少などを理由に一時期途絶えたものの、平成3年に保存協議会の手によって復活した。現在は、主催者の生田剛男(いくたたけお)さんを中心に、さまざまな工夫と苦勞を重ねながら伝統を守り続けている。

1



安芸
地域

野根八幡宮祭(流鎗馬)

東洋町野根

毎年10月の第1日曜

高知ならではの！

「奇祭」とも言われる嶺北の伝統行事

男性たちが舞堂(まいどう)で御神酒を酌み交わし、大数珠を回し続ける祭り。男性であれば誰でも当日参加ができる。主催者であり、南川地区長の竹政敬生(たけまさけいお)さんは、毎年楽しみにしている人たちのために、時代の流れに合わせ試行錯誤しながら、この祭りの存続を目指しているという。

3

土佐町南川

7月の土用に入った最初の日曜

※詳しい開催日は、土佐町役場へお問い合わせを。

嶺北
地域

南川百万遍祭

物部川
地域

大川上美良布神社秋季大祭

香美市香北町美良布

毎年11月3日

2

子どもも女性も みんなでつくる 地域の祭り

無形民俗文化財に指定されている神輿行列「おなばれ」や、約6mの大鳥毛を若者が神社拝殿に差し入れる「練り込み」が見どころ。子どもも「棒打ち」「碁盤振り」「浦安の舞」で参加し、女性は着付けやメイクを担当。さまざまな役割で地域の人々が関わり、みんなで祭りを盛り上げている。

高知市一宮

毎年8月24、25日

高知市

しなおい
志那祢祭

5

人から人へつなぐ 1トンの大松明!

最大の見どころは、重さ約1トンの大松明に火を灯し、五穀豊穡を祈りながらお供え物の新穀を運び深夜の神社まで練り歩く「御神穀祭(おみこくさん)」。久礼の町で長く受け継がれてきたこの祭りは、令和8年に国の重要無形民俗文化財に指定された。

高知の祭りは、地域によって本当にさまざまです。祭りや民俗芸能を見れば、その土地の歴史や文化にも触れることができます。今、祭りや民俗芸能は少しずつ失われつつあります。まずは見て、知ることから。そんなふうに祭りを楽しんでもらえたらうれしいです。

高知県立歴史民俗資料館 学芸員
うめの みつおき

梅野 光興さん



松明に込める 厄払いと家内安全の祈り

「土佐神社」で行われる、土佐の夏の終わりを告げるとされる祭り。24日早朝の忌火(いみび※)祭で焚かれた火は、25日夕刻まで絶やすことなく灯され、参拝者は「お松明」をかざして家に持ち帰り厄を祓う。25日の御神幸(おなばれ)では、神輿の下をくぐると無病息災の御利益があるため多くの人が集まる。

※神職がおこした神聖で清らかな火のこと

6

奥四万十
地域

久礼八幡宮
秋季大祭

中土佐町久礼

旧暦8月14・15日(9～10月頃)

幡多
地域

半家天満宮
秋祭り

四万十市西土佐半家

毎年11月8日

大きな牛鬼が沈下橋を渡る 半家の秋祭り



神輿に花に国宝 見どころ満載の秋祭り

4

仁淀川
地域

おむら

小村神社秋例大祭

日高村下分

毎年11月15日

日高村の小村神社で毎年行われる秋季大祭。白装束の担ぎ手が神輿を担いで練り歩く「おなばれ」や、華やかな花(写真右側)が見どころ。この日に限り、御神体である国宝「金銅荘環頭大刀拵・大刀身(※)」を拝観できるのも大きな特徴。古くから続く神社ならではの祭りを楽しめる。

※こんどうそうかんとうのたちこしらえ・たちみ

P12「秋葉祭り」
(仁淀川町)

P07「葉山花取踊」
(津野町)

P13「津野山古式神楽」
(津野町)

P11「三嶋神社秋祭り(御神幸)」
(梶原町)

P10「地吉八幡宮秋季大祭
(五ツ鹿踊り)」
(四万十町)

P04「なかむら踊り・しまんと提灯台パレード」
(四万十市)

四万十市西土佐半家の「半家天満宮秋祭り」は、牛鬼を先頭に神輿や花取踊の若者、子どもたちが半家沈下橋を練り歩く。牛鬼が道を清め、その後を神輿が進む。境内では花取踊や五ツ鹿踊りも披露され、地域に受け継がれる多彩な伝統芸能を楽しめる。



浜辺の砂地で舞うのが赤野の伝統。足が取られやすい砂上で魅せる力強い舞には、非常に高い技術を要する。



教わった技と行動力 舞い手から伝統の担い手へ



赤野獅子舞保存会
おかばやし りおん

岡林 怜皇さん

幼少期に魅了された赤野獅子舞の舞い手を目指し、有光さんのもと獅子舞の技術を継承。現在、獅子舞の演者をはじめ、次世代のキーマンとしても活躍中の19歳。

舞台裏で子どもたちと交流する岡林さん。地域のお兄ちゃん的存在として、子どもたちからも親しまれている。

小学生の頃、獅子舞を舞う上級生たちの凛々しい姿に魅了され「自分もあの舞い手になりたい」と憧れを抱いたという岡林さん。その思いを受け止め、一から技を教えたのが師匠の有光さんだった。今年の祭りでは、獅子舞の「後ろ馬」として力強い舞を披露。繊細な足運びから、動きをダイナミックに見せる袖の振り

まで、師匠仕込みの技を存分に魅せた。そんな岡林さんが、有光さんから「技術以上に学んだ」と語るのが「行動することの大切さ」だ。過疎化やコロナ禍で祭りが途絶えかけた時も、有光さんは若い世代に声をかけ、地域を巻き込みながら祭りを復活させた。自ら動き、町に活気を取り戻していく姿は、岡林さんの心に

強く残っているという。最近では、岡林さん自身が地域の子どもたちに獅子舞を教える機会も増え、今度は自分が伝統を担う側になったことを実感している。師匠から受け継いだ技と「まず自分が動く」という姿勢を胸に、赤野の獅子舞を次の世代へつないでいく。

憧

れ

の

バ

ト

ン

今回の関係

師

弟

匠

子



有光さんが広げた温かな輪に集まってきた人々が、世代や地域を超えて神輿を担ぎ、祭りに新たな息吹を吹き込む。



赤野獅子舞保存会 代表
ありみつ しんご

有光 新五さん

赤野獅子舞の存続に向けて立ち上がり、地域全体が関われる土台を構築。子どもからお年寄りまでを巻き込み、伝統を次世代へとつなぐ中心人物として活動している。

教え子と共に挑む 10年後の伝統のかたち

今から4年前、消滅の危機にあつた赤野獅子舞「残したい」と声を上げた若者たちの思いを受け、有光さんは世代を問わず賑わう新たな土台作りに奔走してきた。赤野小学校で毎週日曜に行う練習は、誰もが参加できる温かな空間。大人が楽しむ姿を見て、子どもたちも自然と魅了されていく。そして、その輪の中心にいる一人が、

小学生の頃から有光さんが獅子舞を教えてきた岡林さんだという。コロナ禍による中断を経て復活した際も戻ってきてくれたといい、その時のことを有光さんは「嬉しかったし、希望になった」と振り返る。地域で若手の担い手が育ってきたことで、年々活発になっていく赤野獅子舞。最近では国内のみならず海外での公演にも意欲的で、

今年8月には台湾での獅子舞公演も実現した。何より、教え子である岡林さんが、今や若い世代と地域をつなぐキーマンへと成長した姿は、有光さんにとって大きな希望だ。彼らが作る10年後の未来を楽しみに、憧れのバトンは今日も次世代へとつながつていく。

作る人、伝える人、つなぐ人、遺す人…
ここ高知で、そんな仕事や活動をしている人と
その人がリスベクトする人にスポットを当て
2人の関係性、双方の思い、そしてこれからのことなど
胸に秘めたる熱い思いをひもといていく

祭りの最中、笑顔で未来を語り合う二人。師から受け継がれた情熱と技が、温かな絆となって赤野を照らしていく。



声届きよう!

色が鮮やかに見える高知県。いろいろな角度で、色特集などどうでしょうか?
赤にまつわるものを集めるとか。(高知県・50代)

ワカモノがゆく! vol.9

土佐文化体験記

高知県内各地で脈々と継承されてきた
地域の文化をワカモノたちが体験!
今回は、地方車奨励賞を受賞したこともある
香南市のよさこいチーム「おきやく屋」で
地域の小中高生が地方車づくりに挑戦!



みんなでわいわい
楽しい「おきやく屋」が
好きです!



体験者(代表)

のぶよし

信吉 しずくさん

赤岡中学校1年生。よさこい祭りには幼少期から踊り子として参加。活気にあふれた「おきやく屋」に魅力を感じ、2年連続でチームの一員に。

みんなで作り上げる
思いが詰まった地方車

よさこい祭りの地方車は、車を華やかに装飾するだけでなく、車上や荷台をステージとして活用するなど、観客や踊り子との一体感を生み出す工夫が凝らされている。一方で、高さや幅などの車両規定を満たしながら、デザイン通りに仕上げるのは至難の業。プロに制作を依頼するチームも少なくない。

そんな中、香南市のチーム「おきやく屋」では、毎年手作りで地方車を制作。代々受け継がれる骨組みを元踊り子の大工が組み立て、地方車班を中心にスタッフや踊り子も力を合わせて仕上げていく。おかみの坂本さんは「みんなあがが集まって、ああじゃないこうじゃない言いもって楽しんで作ってくれよう」と話す。みんなで作り上げる時間と人のつながりこそが「またここで踊りたい」と思わせるチームの魅力なのだ。



香南市夜須町

地方車 (じかたしゃ)

高知の「よさこい祭り」で、踊り子
を先導するのが「地方車(じかた
しゃ)」。音楽を鳴らすための音響
機材や生バンドをのせたトラック
等の車両のことで、チームごとに工
夫を凝らした装飾がされているの
も大きな特徴。平成10年には「地
区競演場連合会 地方車奨励賞」
が設けられ、これまで多くのチーム
の地方車が受賞してきた。

問い合わせ先／088-875-1178
(高知商工会議所内
よさこい祭振興会)



1.時折談笑しながら手際よく枠塗りを進めていく。 2.左から、おかみの坂本明子(さかもとあきこ)さん、代表の岡田光司(おかだこうじ)さん、スタジオハnzの田中たい子(たなかたいこ)さん。 3.デザイン事務所「スタジオハnz」の田中さんが手描きのイラストやキャラクターなどを手がけ、各々のアイデアを元に地方車のデザインを作成。 4.緊張と笑顔を交えながらの取り付け作業。

「おきやく屋」の地方車づく
りには、祭り本番の約1ヶ月前に
スタート。大きな車体がすっぽ
り収まる青果物倉庫に集まっ
たのは、香南市の小中高生た
ち。幼い頃から踊り子として
参加してきた子もいれば、地
方車という言葉を知って聞
く子もいる。初対面同士でも
すぐに打ち解け、地方車班の
軽快な声掛けに合わせて、何
本もの枠組みを順調に塗装。色
塗りを終えると、初めて手に
する工具に緊張しながらも、
周りに見守られながら車体へ
の取り付けにも挑戦した。

少しずつ形になっていく地
方車を前に「まだ完成形は想
像つかんけど楽しみ!」「お客
さんに見てもらえるのが嬉し
い!」と、祭り本番の日を心待
ちにする子どもたち。参加し
た生徒からは「これから人と
関わることが出来る活動に
参加したい。地方車にも興味
が湧いた」との声も。地域とつ
ながり、祭りの舞台裏を支え
た経験が、子どもたちの新た
な興味の芽を育んでいる。

祭りの舞台裏を支えた
ひと夏の大きな経験

高知の薬味の底力

大葉(青しそ)

今回は

キラリ、そして「ピリリ」と放つ存在感。高知の食文化に欠かせない、辛くて香り高い「薬味」の数々

歴史、産地、そしてその薬味を使った料理のことをもっと知りたくありませんか？



く、高知名物「なすのたたき」には刻んだ大葉をたっぷりのせるのが定番。カツオのたたきや

揚げ物や焼き物とも相性がよく、高知名物「なすのたたき」には刻んだ大葉をたっぷりのせるのが定番。カツオのたたきや

土佐の食に欠かせない 清涼の薬味「大葉」

高知の食文化に欠かせない大葉(青しそ)。地域によっては「せいそう」とも呼ばれ、なんといつても爽やかで清涼感のある香りが魅力だ。生のまま薬味として使うのももちろん、揚げ物や焼き物とも相性がよく、高知名物「なすのたたき」には刻んだ大葉をたっぷりのせるのが定番。カツオのたたきや



ハウスいっぱいに爽やかな香りが広がる中、鮮やかな緑の葉を一枚一枚丁寧に手摘みで収穫。愛情を込めて全国へ届けられる。



薬味から「主役」へ

女性部会の情熱とアイデア

そんな高品質な大葉を丹精込めて栽培しているのが「JA高知県南国市園芸部大葉部会」の皆さん。栽培だけにとど

まらず、添え物になりがちな大葉をもっと料理の主役にしたいと思い、さまざまなアイデア料理を考案している。うま味の豚肉と大葉を重ねたミルフィーユカツや、ひんやり爽やかな大葉シャベットなど、家庭でも気軽に試したくなるレシピを発信。いつもの料理にひと葉加えるだけで味わいの幅が広がる大葉の魅力を、さまざまな料理を通して届けている。



JA高知県南国市大葉女性部

のむらみちこ
野村 美智子さん(右)

せきだみよこ
関田 美代子さん(左)

話し手

高品質な大葉の栽培に加え、大葉が主役になるレシピの開発にも尽力する女性陣。手塩にかけた大葉で地域を盛り上げる。



声届きゅう!

先日「山椒」を求めて日高～佐川～越前に行き、乾燥した実を購入して帰りました。初めてミルを買って、本場の山椒の香りを楽しむことができました。(岡山県・60代)

5歳の頃から夜須町の伝統的な祭り
「手結(てい)盆踊り」に参加(写真中央下)。



高知らしい衣装を作りたいと、兄の
フラフを譲り受けて制作した「竜田丸」。



Junoデザイナー
こまつみか
小松 希芳さん
@06juno20

平成7年生まれ、香南市夜須町出身。幼少期から興味のあったものづくりに没頭している内に、趣味が仕事に。平成29年に自身のブランド「Juno(ジュノー)」を立ち上げる。夜須町の豊かな自然と、人々の温かい人柄が大好き。

※子どもの健やかな成長を願って、このほりと一緒に掲げられる大きな旗

自身の世界観を発信していく。

地元の人から譲り受けた着物の帯やフラフ(※)を素材に、唯一無二のデザインを生み出す小松さん。DIYが得意な父と洋裁をしていた祖母の影響で、幼い頃からものづくりに親しみ、祖母からミシンを譲り受けたことをきっかけに服作りの道へ進んだ。現在は、母校の「太平洋学園高等学校」で外部講師を務めるほか、海外のファッションショーへの出演やステージ衣装の提供など、幅広く活動している。作品の着想を夜須町の豊かな自然から得ることも多く「全身全霊で四季を感じられる夜須が心地いい」と話す。活動の場を世界へ広げながらも、拠点を夜須町に置き続けるのは、これまで見守り、応援してくれた地域への恩返しがしたいから。これからも地域に根ざした「身近なデザイナー」として、高知から自身の世界観を発信していく。

オーダーメイドが中心だが、現在ECサイトでの販売も準備中！



こだわりと愛情たっぷりの衣装たち



高知で始めた若い感性と文化の兆しを追いかけろ！

はと は さ
じと じ っ
めで ま と
るる
！

Vol.7

手仕事で恩返し
好きなことをやり続ける信念

声届きよう！ 娘が大学で地域の魅力について学んでおり、家族も改めて高知の良さを知ることとなりました。軽トラを運転するべく娘は免許取得に励む夏です。(岡山県・40代)

つないでつむいで

県史編さん

須崎市久通での聞き取り調査
(久通交流会館風の里にて)



民俗部会が聞き取り
調査を進めています！



高知県史(自治体史)とは？

高知県について伝え残されたさまざまな資料を調査し、県の歴史を詳細に記したもの。郷土の歴史を知る、大切な手がかりだ。



地域の暮らしを聞き取る

民俗部会では、令和13年度に発刊予定の『高知県史 民俗本編1』への掲載に向け、昭和20年代から昭和40年代の暮らしについて、県民の方への聞き取り調査を進めている。

機械化が進む前の農作業や伝統的な漁法、自然に関する言い伝えやおまじないなど、県内の約170ヶ所で行っている。海岸部、平野部、山間部で生業や暮らしに違いがあることはもちろんだが、隣接する地域でも林業が盛んな地域では馬が多く、農業が中心の地域では耕作用の牛が多いといった様子が見えてくる。

川や田んぼでウナギや魚を取ったり、野山にワナを仕掛けて遊んだりした子どもの頃の思い出を語ってもらったことも、当時の暮らしを辿る手がかりのひとつだ。

この調査は今年度と来年度の2年間で実施し、県内各地で聞き取りした結果をまとめ、民俗地図(※)という形で本に掲載していく。



峠から見た久通地区



旧久通小学校跡(現須崎市立久通交流会館風の里)

地域の記憶を未来につなぐ

この日は観音堂で有名な須崎市の久通(くつう)地区に伺った。久通は県道23号線の鳥坂トンネル手前を脇道に入って山のくねくね道を約20分、横浪(よこなみ)半島のつけねにある太平洋に面した海と山に囲まれた集落だ。

調査に協力いただいたのは久通出身の80〜90代の3名の方で、お話によると昭和40年代に道路が通るまでは船で多ノ郷(おおのこう)へ出るか、徒歩で山道を越えていたとのこと。当時の久通では、伊勢エビ漁などの漁業のかたわら、山を開墾し、つま芋や大角豆(ささげ)などの農作物を栽培していた。「今でこそ作る人も少ないが『久通の芋ようかん』と言えば、久通の名物の一つ」と嬉しそうに紹介してくれた。特に印象に残ったのが、台風のとときに玄関の軒先に鎌を吊るし「ショーホイ!」と言って叫び、風が当たらないようおまじないをしていたと教えてくれたことだ。

過疎化や高齢化で地域の歴史を受け継ぐ人が減る中で、少しでも記録に残し、記憶を未来につないでいく。

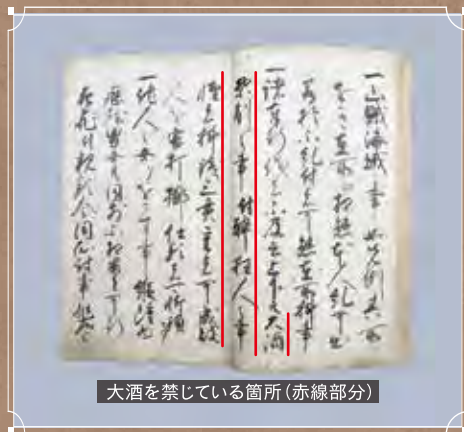
第18回 明治大学博物館

史料が語るもの語

長宗我部元親の二大業績といえば、一国総検地による『地検帳』の作成と、初の成文法である『掟書』を制定したことだろう。だが、『掟書』の方は原本が確認されていない。



吉良似白による署名と花押



大酒を禁じている箇所(赤線部分)



ママ
長曾我部元親百ヶ條(慶長二年本)
(所蔵:明治大学博物館)
※曾はタイトル通りに記載



明治大学博物館が入る
明治大学アカデミーコモン外観

「長宗我部氏掟書の写本」
「大酒をしたら厳しい罰を与える」など、個性的な法をつくった長宗我部元親。彼が領国支配のために定めた掟書(分国法)は、通称『長宗我部元親百箇条』とも呼ばれている。現在、最古の「写本」が明治大学博物館に所蔵されている。本史料で注目されるのは、奥書に名を残す「似白」という人物。これは元親の右筆(書記)の一人「吉良似白(さらににはく)」と思われる。「内々懇望の条、本のまま写しこれをまいらせ候…」とあるので、慶長2(1597)年6月、似白が原本を忠実に筆写(臨写)したことがわかる。原本が不明な場合、「写本」の持つ史料価値は極めて高い。

※とさぶし第54号におきまして、一部誤りがございました。

『とさぶし』第54号23ページの「史料が語るもの語」の中で、岡豊山に残る石碑「征清凱旋碑」の碑文について「揮毫(きごう)は～坂崎紫瀾」との記載は誤りでした。坂崎紫瀾は、字を書いたのではなく文章を作成しました。お詫びして訂正いたします。

高知県の
歴史に触れる

県史特集

四〇〇年をつなぐ 越知面の結いの心

今回のテーマは、令和6年に県保護無形民俗文化財に
指定された梶原町の「越知面二十日念仏」。
華やかな装束で踊る、400年以上続くとされる伝統行事は、
長い年月を経ても、その姿をほぼ変えていないという。
地域で受け継がれてきた祭りの歴史と未来を訪ねた。



総勢21人で繰り広げる念仏踊。大太鼓をは
じめ、トビ太鼓、大団扇、鉦などの役があり、そ
れぞれを担う集落は伝統的に決まっている。

400年以上受け継がれる
華やかな装束と踊
越知面の二十日念仏

梶原町越知面(おちめん)で、
400年以上にわたり受け継が
れてきた「二十日念仏」。毎年8
月20日、地域の人々は集落の中
心にある「旧善福寺跡」に集う
と「ヘンナモーアーミードウバイ
(へんなむあみだぶつ)」の念仏を
調子を変えながら繰り返し詠
唱する。それに合わせて鉦(か
ね)や太鼓が鳴り、色鮮やかに飾
られた団扇(うちわ)がひるがえ
る。華やかな衣装に長い鳥毛を
被った踊り手たちは、飛び跳ね
るように舞い、集落や山々に念
仏の声がしみわたっていく。

そんな越知面の二十日念仏
は、十七世紀の初頭、越知面で
疫病や飢饉が相次いだことをこ
の地で非業の死を遂げたと伝わ
る中越長左衛門正友の祟りと
考え、その御霊(みたま)を鎮め
るために始まったとされる。驚く
のは、長い年月を経ても「祭りの
形そのものはほとんど変わって
いない」と言われていることだ。
実際に、過去の調査記録と現在
を比べても、踊りの構成や役割
などに大きな変化はなく、役ご
との座る位置や順番も、古くか
ら受け継がれてきた姿のままだ
という。

「やらないかん」が つなぎ続けてきた 越知面の年中行事

「小さい頃から、これはずっとやらんといかんもんじやと思ひよつた」。越知面で生まれ育ち、今年から区長を務める中越さんはそう振り返る。父親も二十日念仏のトビ太鼓を務め、自身も長年参加してきた。かつては8月20日になると農作業も休み、大勢の住民が見物に集

まる特別な一日だったという。「楽しいお祭りというより、その時期が来たら当然やらないかん、という感じ。生活の一部やね」。踊りの節回しも、中越さんが子どもの頃から変わつていない。コロナ禍でも中止されることはなかったという。「とにかく、地元で残していかな」と。そんな思いもあり、特別に組織された保存会ではなく、越知面という地域そのものによって受け継がれている。



色鮮やかな衣装のトビ太鼓。被り物は鳥毛と馬の毛で装飾されたもの。各集落で継承され続けている。

「ひとりでは暮らせない」 山里に根付く結いの心が 伝統を未来へつなぐ

人口減少が進む中、二十日念仏も担い手不足という課題に直面している。本来は家ごとに世襲してきた役も、現在は同じ集落の住民が代わりを務めるなど、形を工夫する。それでも中越さんは「400年以上続いてきたことやき、なんともならんかった、という言い訳はできん」と話す。その言葉に見えるのは、越知



二十日念仏の記録写真も見ながら、祭りの歴史について聞かせてもらった。
(写真右：中越さん、写真左：大本文化財部会委員)

昭和32年、梶原町越知面生まれ。建設業に携わり、町内外の茅葺き屋根の施工にも従事。長年「二十日念仏」に参加し、令和8年からは越知面区長を務めるなど、地域づくりに力を注いでいる。

なかこえ おさむ

中越 修さん



梶原町の山あい位置する越知面地区。豊かな山林に囲まれ、谷あいには集落や田畑がある。人々が自然と寄り添い、助け合いながら暮らしてきた農山村の風景が今も残っている。

※とさぶし第55号におきまして、一部誤りがございました。県史特集の24ページに掲載されている秋田さん、岩崎さんの紹介文について、秋田さんは「昭和13年、朝鮮安州生まれ」、岩崎さんの生年は「昭和17年」が正しい表記です。また、同特集の25ページの写真説明中「3000世帯」の表記は、正しくは「3000人」です。なお、同ページ掲載の右上バイクに乗った駐在保健婦写真と左下梶原町の写真は「高知県立公文書館」所蔵です。お詫びして訂正いたします。

バケペイライア

其の十

土佐の山中に響く 女の笑い声

「笑い女」は、高知の山中に現れると伝わる女の妖怪。県内各地に言い伝えが残されている。

江戸時代の山北（現・香南市）では、山に狩りに入った奉行が女に笑いかけられ、その笑い声が山中に響き渡り、生涯耳から離れなかったという話がある。同市の土居山城跡には、笑い女を退治したとされる剣が祠に祀られているという。一方、幡多郡橋上村（現・宿毛市橋上町）や土佐山村（現・高知市土佐山地区）では、夜の深山に「ゲラゲラ」という不気味な笑い声だけが聞こえた。安芸郡和食村（現・芸西村和食）では、山師の吹く尺八の音色に誘われて現れた女が自ら「笑い女」と名乗り、山師が「笑いを聞かせてほしい」と頼むと、山谷に響き渡るほど笑い、大鋸（おが※1）や鉈（なた）をせんべいのようにバリバリと食べたという。

これぞ「はちきん（※2）」と言わんばかりの豪快さ。もし出会った時は、耳の保護をお忘れなく……

（※1）木材の縦びき専用の鋸（のこぎり） （※2）土佐弁で、元気で男勝りな女性を表す言葉
参考文献：日本怪異妖怪大辞典（小松和彦／監修 小松和彦・常光徹・山田堤治・飯倉義之／編集）
日本怪異妖怪事典 四国（朝里樹／監修 毛利恵太／著）
日本現代怪異事典（朝里樹／著）
山の怪異大辞典（朝里樹／著）

贈り物

とさぶしからの

店…当選ハガキを持って提供店へ
 郵便…郵便または宅配便にて自宅へお届け

P21 Juno(ジュノー)

Junoロゴ入り「帯」ストラップ

3名様

衣装に使用した着物の帯をリメイクした、
世界に一つだけのストラップ!バッグやキ
ーのアクセントにピッタリ♪

※この中からランダムでの発送となります



応募締切

令和8年12月20日

クイズとアンケートに答えて読者プレゼントに応募しよう!

クイズ

旧暦6月10日に室戸市で行われる伝統行事といえば?

※読者プレゼントの応募は「とさぶしwebサイト」もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合は①年代②性別③お住まいの都道府県④とさぶしを手に入れた場所⑤とさぶしを知ったきっかけ⑥良かったコーナー(複数回答可)⑦満足度(10段階評価をお願いします)⑧とさぶしを読んで実際に試してみたい、食べてみたいなど意識変化はありましたか?(はい/いいえ)⑨「はい」の方。その理由を教えてください⑩とさぶしを読んで、実際に冊子掲載店や場所に行ってみたり、商品を購入してみたりしましたか?(はい/いいえ)⑪クイズの答え⑫希望する商品⑬氏名⑭発送先の住所⑮電話番号⑯メールアドレス(※デジタルギフトご希望の場合)⑰「声とときゅう!」(※)をご記入の上、下記の宛先まで締切日(令和8年12月20日)必着でお送りください。〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこう

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。●いただきました個人情報はプレゼントの発送にのみ使用します。※とさぶし第48号より、各ページ下に読者のみなさんから届いた声の掲載を始めました(今回お寄せいただいた声は第57号に掲載予定です)。とさぶしに関する「感想」や、次回の特集テーマである「地域おこし協力隊」や「移住」にまつわるエピソードなど(30文字程度)をお寄せください。掲載は抽選となります。(例)高知県内で移住するならどこかな?と考えています。(高知県・30代)



P16-17

赤野獅子舞保存会

赤野獅子舞手拭い

3名様



獅子舞とテガイ子(演者)が格闘している、迫力あるシーンが描かれたオリジナル手拭い。少し大きめサイズなので、壁に飾るのもおすすめ♪

P20

JA高知県南国市大葉女性部

大葉茶 5名様

南国市特産の大葉を100%使用。爽やかな香りとスッキリとした味わいが楽しめる、ノンカフェインの和のハーブティー。



QUOカードPay1000円分

5名様

※こちらの商品をご希望の方は、応募時にスマホで受信できるメールアドレスを記載してください。

※QRコードが読み込めない場合はLINEアプリから友だち登録していただき、ご応募ください。

とさぶし



A BRAND-NEW CHAPTER KYOCHI
TOSABUSHI

とさぶし

<https://tosabushi.com>

web
見てちゃ!

発行
高知県文化生活部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号(本庁舎5階)
Tel 088-823-9793 Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp
発行日:令和8年9月30日(季刊)

企画 とさぶし編集委員会
制作 ほっとこうち

バックナンバーの入手方法・お問い合わせ

高知県文化生活部文化振興課(上記)まで
ご連絡ください。

Facebook、LINE、Instagramでも情報配信中!



Facebook



LINE



Instagram



特集

祭りのかたち

- P02
- P03 かたちの奥深さを知ると
祭りがもっと面白くなる!
- P04 祭りの目玉!
- P06 踊りと装い
- P08 祭りの化粧
- P10 祭りの面
- P12 祭りの技!
- P14 まだまだある!土佐の祭りのカタチ

連載

- P16 憧れのバトン【弟子×師匠】
- P18 土佐文化体験記【地方車(じかたじゃ)】
- P20 高知の薬味の底力【大葉(青しそ)】
- P21 さっとはじまる とさではじめる!【Juno(ジュノー)】
- P22 つないでつむいで 県史編さん
- P24 県史特集【四〇〇年をつなぐ越知面の結いの心】
- P26 バケベディア【笑い女】
- P27 とさぶしからの贈り物